

市況の影響を受けつつも、 安定的に利益を確保できる 収益基盤を確立



取締役 執行役員常務
森田 俊平

Question

2015年3月期の営業収益・
営業利益がともに過去最高と
なった背景を教えてください。

これまでの過去最高であった2006年3月期の営業利益が株式市場の活況に起因するものとすれば、2015年3月期はSBIグループの全体的な収益基盤強化の成果と言えます。営業利益682億円は、一時的要因であるSBIモーゲージの売却益160億円を差し引いても522億円となり、2014年3月期の422億円だけでなくこれまでの過去最高であった2006年3月期の496億円をも上回る非常に高い水準となりました。これは、アセットマネジメント事業で保有する営業投資有価証券の「公正価値の変動による損益及び売却損益」が、2014年3月期における94億円の利益から43億円の損失に大きくマイナスへ転じながらも、その分をカバーして最高益を更新したことになります。

当社グループの金融サービス事業各社は、企業生態系内で密接に結びついています。SBI証券の顧客基盤や取引額を活用することで、住信SBIネット銀行は預金残高を伸ばし、SBIジャパンネクスト証券やSBIリクイディティ・マーケットは取引量を増やしました。そして最近ではSBIリクイディティ・マーケットの取引基盤を活用してSBI FXトレードが顧客数や収益を一気に伸ばしました。同時に赤字事業の改善も進み、いよいよSBI損保の黒字化する時期が来たのです。

このように、株式市況の影響を受けに

くい銀行、為替取引、保険などの事業が伸びていることがSBIグループの収益基盤の安定性の向上を物語っています。そして順調に成長を続けている主力の証券事業が、信用取引建玉や投資信託などの残高を伸ばしストックに基づく収益を増やしてきたことで、市況が悪い時でも安定的に、良い時には一段と高い収益を獲得する力がついたというのが現状のSBIグループの収益力と言えます。

Question

2016年3月期は
どのようになりそうでしょうか？

2016年3月期も良好な滑り出しを見せており、堅調に推移するものと思います。2015年3月期におけるSBIモーゲージの売却益を除いて考えても、金融サービス事業各社の収益力は一層向上しており、増益を達成する力は十分ついていると考えています。さらに、「選択と集中」の成果やバイオ関連事業での収益が積み上がることで、全体として2015年3月期の業績を上回ることも十分可能でしょう。バイオ関連事業ではSBIバイオテックの子会社でアップフロントフィアを上半期にも受領予定であり、SBIファーマでも技術導出が可能で有望なパイプラインが複数あります。

また新たな事業という意味では、SBI生命が加わったことで金融サービス事業の伸びしろが一段と拡大したことになります。この一年で新規契約獲得のた

めの準備を進め、SBIグループの持つ企業生態系やネットとリアルの販売チャネルを活用して一気に成長して欲しいと期待しています。またグループの運用資産が飛躍的に増加したことを受け、資産運用サービスの強化も掲げています。こちらも新たなSBIの強みになるでしょう。

Question

経理・財務担当役員から見た
今後の課題はなんでしょうか？

当面の課題は、赤字事業であるバイオ関連事業を収益化し、独り立ちできるようにすることです。金融サービス事業でSBI損保の黒字化に目途が付き、SBIカードは銀行傘下へ、またアセットマネジメント事業ではSBI貯蓄銀行の経営が軌道に乗った今、いよいよバイオ関連事業の収益化に注力する時期が来たと思います。SBIファーマは臨床試験や基礎研究においてこの1~2年でめざましい成果を上げています。あとはこれを収益に繋げることが、SBIグループ全体としても一番の課題と言えるでしょう。

中長期的にはアジアにおける事業展開が課題となります。SBIグループは時代の潮流に乗る戦略で成長スピードを速めて来ました。アジアにおいてSBIグループはまず投資事業からスタートし、続いて金融サービス事業を各国とのパートナーとの合弁で展開しています。このようにして築き上げたアジアでのネットワークが、SBIグループの中長期的な成長の推進力になることでしょう。